

私 の 夫 工 夫

生徒が変える 制服・学校ルール

前 津山市立勝北中学校
現 美咲町立柵原学園

教諭 中山 大樹



1 はじめに

昨年度まで勤務をしていた津山市立勝北中学校で私にとって、学校の制服やルールについて考えさせられる大きな出会いがあった。それは勝北中学校出身で「性の多様性 LGBTQ」について、全国で啓発活動をされている NPO 法人レインボーハートokinawa 理事長の竹内清文さんとの出会いである。

今回は、前任校の津山市立勝北中学校での、竹内清文さんとの出会いから生徒と学校が一緒になって変えていった制服・学校ルールの取組について紹介をする。

2 制服・学校ルールを 変えるまでに

以前より、中学校のルールや性別による頭髮、制服の規定を受け入れることがしんどいという生徒の声があった。当時、私は生徒指導主事をしており、従来の細かい学校ルールを守らせるよう、生徒に指導をしていた。時には、生徒とぶつかることもあり、うまく人間関係を築けないこともあった。

この時に岡山県の人権学習充実拠点校事業の指定を受けることになり、私は事業の担当者を任された。教職員全員で生徒の人権や一人一人の思いを大切にすること、深く考える貴重な1年間

となった。

この取組の一環として、竹内清文さんに講演にきていただくようになり、「性の多様性」について生徒と考える機会をいただいた。その中で生徒から、「認め合う」「違ってもかまわない」「自分らしさを大切にする」などの発言が多く出てきて、一人一人のちがいを認めることの大切さを学び、生徒の人権意識の高まりや思い、考えを実感することができた。

この視点で従来の学校ルールを見ていくと、頭髮や靴、靴下など、時代に即さず、制服についても性別によって完全に分けられていた。また、女子生徒からは、スカートではなくスラックスを履きたいなどの声も大きくなり、生徒会を中心に制服・学校ルールを見直していく気運が高まっていった。

3 実際の取組

スタートは、靴下のルールについてだった。生徒会が生徒の意見

や考えをまとめ、それをもとに教員と一緒に話をした。その中で高校受験を見据えても、社会生活を考えても困らないだろうという考えのもと、靴下の色は「白色」のみから「黒色」「紺色」もよいというルールに変更をした。この変更の発表にあたり、生徒会が生徒に向けて、「自分たちで考え、要望し、獲得した権利は、自分たちで守っていく責任がある」という自覚と自律についての話をしてくれた。この「靴下の色」の変更を契機として、様々な取組が展開されることになった。



生徒会と教員との話し合いの様子



新しい制服を披露する様子



希望の制服への投票の様子

その後、制服について生徒と保護者にアンケートを実施し、特に制服を変更したいという声が多く

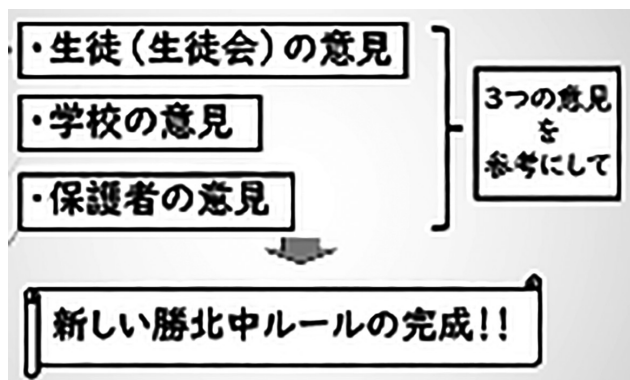
あがるようになった。時代に則し、性の多様性を認め、一人一人の人權を尊重できる新しい制服の導入へと進んでいった。生徒には新制服のデザインや取り入れてほしいポイントなどを書いてもらい、保護者にもアンケートを行った。生徒、保護者、教員が一体感を大切にしなが一緒に進んで新制服の作成を進めていった。

そして最後は、生徒一人一人に希望のデザインに投票をしてもらい完成に至った。生徒が自分らしさを自分の言葉で少しずつ表現し、主体的に動く気運が高まる中で、生徒の思いや考えを尊重し、生徒自身と学校、そして保護者が共に考えながら作り上げた制服となった。

前述の靴下のルール変更を考えていく中で、生徒から他のルールについても、今の時代にそぐわないもの、性の多様性という観点からも強要するべきではないものがあるのではないかと、「見直しをしたい」という声があがった。こ

の思いを生徒会が受けとめ、生徒会と学校とで話し合いを続けた。今回は、ルールを大きく見直すことになるため、中学校生活において基準の一つにしている、高校受験や高校生活でのルールを基に、客観的な判断が必要と感じた。

そこで、近隣の高校に生徒会から電話をして、中学校卒業後につながる高校がどのようなルールを設けているのか、そしてそのルールとの照らし合わせを行った。また、生徒と教員だけでなく、PT



勝北中ルールができるまで

A代表にも意見をもらいながら、生徒・教員・保護者が一体となつて、新しいルールを作っていくことができた。

4 おわりに

私自身、今までのルールを様々な面で緩めたという印象があったため、生徒の生活の崩れにつながるといふようなことも危惧していた。しかし、生徒自身が主体となつて変えていったことで、生徒の生活が緩む様子はなかった。また、生徒も一緒に決めたルールなので、以前よりも生徒に問いかけやすくなり、ルールを守る意味や責任について伝えられるようになった。今回の取組で、生徒が主体となつて動くことにより学校は変わっていくということを実感した。引き続き、生徒が主役となつて生き生きと活躍できる場面を作りたい。

私 の 工 夫

「探究的な授業」と「複線型授業」をやってみた

県立勝山高等学校

指導教諭 香川 英之



1 はじめに

私たちが生活の中で利用している、様々なソフトウェアやアプリは未完成の状態で世に出てくる。そして、利用者からの意見や不具合の報告を受けて、アップデートしながら精度の高いものに仕上がっていく。私たちの教育実践もこうしたべきだと思う。もちろんビジョンや計画は必要だが、恐れずに挑戦し、自らの反省や生徒からのフィードバックを受けて、よりよい実践にアップデートしていけばよいと考えている。

今後のみなさんの挑戦を後押しするものになることを願い、私がこの2年間で挑戦した授業の工夫を紹介させていただく。

2 探究的な授業

令和6年度、県総合教育センターの「高等学校数学研修講座」において、東京学芸大学の成田慎之介先生のご指導の下、研究授業を実施する機会をいただき、それを機に探究的な授業について考えた。高校数学において「生徒が自ら課題を発見し…」というのとはなかなか難しいのだが、授業を「デザインする視点を「教師がいかに教えるか」から「生徒がいかに学ぶか」に変え、年間を通して、生徒が深く考え、対話を通して解決策を探求するというプロセスを重視した授業を行った。

(1) 授業の概要

公開授業は、複素数平面の単元で行った。既習の方程式 $z^2=1$

を解くところから始まり、例えば $z^3=1$ でなく $z^4=1$ ならどうか。 $z^5=1$ と同じ解き方ができるか、できないならそれはなぜか、もつという方法はないのか、と探究していった。最終的には、極形式を用いた解法や方程式の解の幾何的な意味に、(おおむね)生徒の力でたどり着くことができた。

授業では生徒から間違ったアイデアが出ることもあった。しかし「間違っているよ」と指摘するのではなく「どうしてそう思ったの?」と掘り下げたり「その方法でやってみよう」と検証してみたりした(もちろん行き詰まる)。その分時

間はおかかったが、生徒の思考が深まり、納得感も得られた上、探究のプロセスをクラス全体で味わい、楽しい時間となった。

(2) 成果と感想

探究的な授業を行うにつれて、テストで空欄のまま提出される問題が減ったのを感じる。授業の中で、「方針を考える」「可能性のある操作を実際にやってみる」を練習した成果だと思われる。また、探究的な授業は、1時間で扱う問題数は少ないものの、設定を変えたり、一般化したり、既習内容と比較したりと、内容を濃くすることができると実感した。

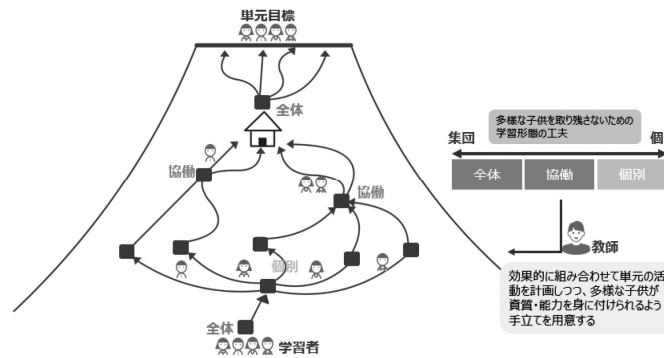
3 複線型授業

令和7年度には、複線型授業に挑戦している。本校には本当に多様な学力の生徒が入学しているが、私が担当することになった1年生の数学Aの授業では、習熟度別授業やチームティーチングの機会は得られなかった。一斉指導が特に



授業の様子 (令和6年度)

難しい状況であったが、これを令和答申で強調されている「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」「学習者自身が学習を主体的に調整する」という課題に取り組む好機とみて、複線型授業に挑戦している。



「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のためのサポートマガジン『みるみる』（文部科学省）より

(1) 基本的な考え方
単元の目標をよりよく達成するためには、「個別」「協働」「全体」を効果的に組み合わせることで単元をデザインすることが大切とされているが、教科の特性や生徒の状況

踏まえ、その考え方を毎回の授業の中にも取り入れることにした。また、単元ごとの学習計画を生徒に示し、見通しを持って学習できるようににした。

(2) 授業の進め方

まず、本時の学習内容や目標を確認させる。次に、生徒に自由に学習させるが、学ぶ教材（教科書、参考書、解説動画など）は生徒が選ぶ、学び方（一人で学ぶ、友達と協働して学ぶ、先生に教えてもらうなど）も生徒が選ぶ、とした。状況によっては、解説が必要な生徒だけを黒板前に集めて指導をすることもあ

る。そして授業の終末には、全体での指導を行う。内容は様々で、重要事項の確認、補足の説明、確認のための小テストなどである。本時の目標が

数学A 第1章「場合の数と確率」 第1節「場合の数」 学習計画						
区	小単位	学習内容	教科書	スタディ		
				スタンダード	バリエーション	チャート
1	1 場合と要素の数	A 集合の要素の数 B 要素の数の計算 C 集合の応用	p.14～17	第1課	PART 1	1～3 9～11
2	2 場合の数	A 場合の数	p.18～19	第1課	PART 2	4
3	2 場合の数	B 1つの法則 C 複数の法則	p.20～22	第1課	PART 3, 4	5～8
4	3 排列	A 順列の総数	p.23～25	第2課	PART 1	12～14

単元ごとに配付している学習計画表の一部



様々な方法で自由に学ぶ生徒

達成できたかペアで確認させることやFormによる振り返りは毎時問させている。

工夫している点として、生徒に十分に考えさせたい、教師の指導が有効であるなど、学習内容によって生徒が自由に学習する時間と全体で指導を行う時間を調整していることが挙げられる。また、解説をする場面では、個別・全体にかかわらず、単に教え込むのではなく、生徒が探究的に学ぶことができるよう工夫して発問している。昨年度の実践が今年の実践にも生きてくるのが嬉しい。

(3) 成果と感想

生徒は非常に意欲的に学んでおり、個別最適な学びが機能しているのを実感している。特に、予習として解説動画を視聴した生徒や理解度の高い生徒は、友達に教えたり、参考書で発展的な学習をしたりと、深い学びを実現している。もちろん、自分で学習を進めることが困難な生徒もいるが、友達や教師に支えられながら努力する姿が見られる。十分ではないが、一斉指導を中心とした授業よりは成果が期待できるのではないかと感じる。

4 おわりに

2年間で2回も授業スタイルを変えた。大変な挑戦であり、試行錯誤、反省、調整の繰り返しである。しかし、これこそ私たちが生徒に求める「探究的に学ぶ」「主体的に学ぶ」姿である。「教師の学びと生徒の学びは相似形」と言われるが、教師が工夫して授業に臨むことや恐れずに挑戦する姿を生徒に見せることが、最も良い指導になると信じ挑戦をしている。